パンジャーブの地方史については、この地方の歴史的中心であるラーホール(Lāhaur)やその南のカスール(Qasūr)、パンジャーブ北西部の小都市ハサン・アブダール(Ḥasan Abdāl)や同北部の都市スィヤールコート(Siālkot)、パンジャーブ南部の主邑ムルターン(Multan)やかつて藩王国のあったバハーワルプール(Bahāwalpūr)、また聖地ウッチ(Ucc)、その他にはサトレジ川とベヤース川の河間地、ビスト・ジャーランダル・ドアーブの主邑ジャーランダル(Jālandhar)やホーシヤールプール(Hoshyarpur)と幾つかの文献のタイトルに見られる地名に触れただけでも地域的にも網羅的に収集されていることが分かる。地方史関連の文献はしばしば当該都市の小さな出版社から刊行され、発行部数も限られているために、刊行後数年もたつと入手困難となる場合が少なくない。パンジャーブ方面に限ってみても、極めて稀な文献が散見され、そうした独自性がアキール文庫の地方史コレクションに独特の個性を与えていると言えよう。
ところで、地方史ということで、一般的には地域を限ってその地域の過去を扱うことを謳い、事実そのような内容の著作が連想されるのではなかろうか。勿論、アキール文庫に含まれる大多数の地方史関連図書もこうした方面のものである。ただ、これらに加えて忘れてはならないのは、たとえ主題的にそうした地理的限定がなくても、当該地域の過去の再構成に資する、その方面の有益な情報を提供するような文献類の存在である。我々はしばしばそうしたものも地方史と呼ぶ。文学作品や歴史書の類いもそうであるが、その最たるものはスーフィーを扱う聖者伝(タズキラ)等であろう。これらは特定の著名な聖者を扱うものであったり、特定の流派＝教団(スィルスィラ)のそれを紹介するものであったり、直接的には「地方」とは関係がない。ところが、その中では概ねローカルな人物が扱われ、いわば地方史にふさわしいミクロな情報を提供する点でこれに勝るものはないのである。その実アキール文庫の本領もむしろこちらの方にあり、そこで以下こちらに触れてこれをささやかな解説したい。ちなみに、上記の狭義の地方史であるが、この手の著作の出現は英領期を遡ることがないことは付言しておいてもいいであろう。すなわち、この種の著作の生産には限定された空間への意識が伴うことを条件とするが、こうした意識(＝ローカリズム)自体は近代に起源があるようである。したがって、上記の聖者伝にしても、英領期以降のそれらには「どこそこの」と場所を銘打ったものが多数登場し、上記の狭義の地方史との境界はあいまいとなってくる。というより、地域名を冠したそれらはもう既に後者の地方史の一環なのかも知れない。

ということで聖者伝に目を向けると、まず特筆すべきものとして Auliya-e Qasul(AQEEL||B||802||9)が挙げられよう。同書はその特殊な出版事情も絡み、極めて稀な 1 冊である。しかも、アウラングゼーブ期の聖者伝 Akhbar ul Auliya' fi Lisan ul-Asfiya'を中心に幾つかの異なる論文や抜粋なども含み、都市カスールに関する史料集成といった感があり、内容的にも高度である。殊に上記の聖者伝などは既述の地方史的ミクロな情報を提供するという聖者伝の質の在り方をものの見事に見せてくれていよう。更にアキール文庫のこの

方面で目ぼしいものを探せば、カーディリー派ノウシャーヒー支派の聖者列伝に目が止まる。このカーディリー教団の同支派は殊にパンジャーブ地方において絶大な人気を博し、まさにその教団の性格からして「地方」というにふさわしいものであるが、多数の文献資料を残しており、しかも同支派が輩出したシャラーファト・ノウシャーヒーという知的巨人を通じてその多数が日の目を見ることになっている。ただ、その刊本は一般的に入手が極めて困難なのが実情である。ノウシャーヒー支派の聖者伝ということでは、真っ先に挙げられるのが Sharif ut-tawarikh(AQEEL||B||802||21) である。これはシャラーファト・ノウシャーヒー氏の労作であり、その主著とも思しい 1 書である。また、Tazkirah-I Shu‘ara-I Naushahi は、同派に属する詩人伝であり、Tazkirah-I Naushahiyah(AQEEL||B||??)は 18 世紀前期の同名の聖者伝のペルシア語原典とシャラーファト・ノウシャーヒー氏のウルドゥー語訳を収載したものである。Tazkirah-I Naushahiyah(AQEEL||B||801||6)はまさにここでいうところの聖者伝であり、また一般的にシャラーファト・ノウシャーヒー氏の著作は単に市の著述のみではなく、多数の写本その他からの引用を含み、殊に地方史的な情報を提供する上では価値はこの上ない。

次に史書類に目を転じてみよう。この方面でも幾つかの特筆すべきペルシア語のものを中心とする文献に行き当たる。圧巻はスィク王国年代記 Umdat ut-tawarikh(AQEEL||A||308||17)であろう。しかし同じくスィク王国年代記 Zafar-namah-I Ranjit Singh(AQEEL||A||508||25)もあり、また 18 世紀のパンジャーブ史もある。Umdat ut-tawarikh はスィク教の 10 人の教主や 18 世紀の彼らの営みに触れながらも群雄割拠のパンジャーブを統一し、西北インドに一大王国を築いたランジート・スィングの王国の編年体による年代記であり、1885 年と出版年代も古くまずお目に掛かることのない当文庫の中でも折り紙つきの稀覯本である。一方、Zafar-namah-I Ranjit Singh は、主にランジート・スィングの治世初年から 1835-36 年代までの年代記である。また、上記の 18 世紀の史書についても年代順に内容を紹介しておこう。Asrar-e Samdi, (AQEEL||A||308||35)は、18 世紀前半活躍したパンジャーブ太守、アブドゥッサマド・ハーン(1713-1726)の事績について述べたものであり、Tahmas-namah, (AQEEL||A||507||21)は、数奇な運命を経てこの地に辿り着き、最後の同州太守、後にはその夫人に仕えながら、アフマド・シャー・ドゥッラーニーや同じくマラータの遠征、その間を駆け抜けるスィク勢力の騒憂とムガル朝支配体制が崩壊していく同世紀半ば激動のパンジャーブを目撃したタヘマース・ハーンが自らの半生を綴った回想録、Waqiat-i Durrani, (AQEEL||A||508||26)は、アフマド・シャー・ドゥッラーニーの数次にわたる遠征を扱ったものである。このアフガーン皇帝の遠征の持つインド史における意義がどうあれ、彼の活躍の舞台はほとんどパンジャーブであった。一方、Tarikh-I Kunjpura (AQEEL||A||308||23)は現在のインドのカルナール県に位置するクンジプラを拠点としたアフガーン系土豪一族の歴史、また、Zubdat ul-akhbar (AQEEL||A||308||24)はムルターンを支配したサッドーザイ系ナワーブのそれを扱ったものである。また、Sadiq Namah, (AQEEL||A||308||31)はバハーワルプール藩王国の歴史である。これらが何れも入手困難なものであることは付記しておきたい。

さて、パンジャーブ地方は、スィク王国領の英領インドへの併合を通してイギリスの植民地支配下に入る。いわば、この英領支配を通じてこの地方は本格的に近代の大きな波を経験することになるが、上記の「地方史」の出現もまさにその一環であろう。今日に至るまで、膨大な量の地方史文献が執筆されてきたことは言うまでもなく、こうしてアキール文庫にも下記の通り様々な文献が見え、興味深いものがないではないが、ここでは 2 書に触れるのみで止めておきたい。

1 つは、そうした地方史の最初期のものにあたると思われる著作である。それは Tahqiqat-I Chishti, (AQEEL||B||802||14)であり、これは第 3 版のものであるが、初版は 1864 年と古い。パンジャーブ地方での英領支配開始間もなくの時期である。著者はヌール・アフマド・チシュティー、ラーホール郊外を扱った大著である。初版は 1864 年、これはイギリス人行政官の要望に従って執筆されたものと言う。当時のラーホール郊外には、ムガル期ラーホールの営みの跡が廃墟となって累々と広がり、また、スィク王国期のそれ自体生々しく、しかも、早くも植民地都市として鉄道その他近代の所産がラーホール郊外にも押し寄せようとしている時代であり、その名所旧跡、顕著な事物について自由に筆を走らせたのが同書である。極めて情報としても稀なものに満ちており、その情報量の多さに目を奪われると同時に著者の連想を軸に展開が展開を呼ぶ叙述のあり方に驚かされる。多角的に興味深い 1 書である。

もう 1 つは、極めて現代の、しかも学術的に地方史であるかと言えば疑問符が付きかねない、しかし楽しい 1 書である。すなわち、Lailpur Kahani であり、かつてのライヤルプル、今のファイサラーバードについての、現代の著者のアシュファーク・ブハーリーの回想録であり、データのその他の正確さ等はいざ知らず、しかしかつてのファイサラーバードの雰囲気が生き生きと伝わり、厳密な意味での歴史資料ではないにしろ、参考文献としては無視しがたい魅力を含んでいる。

Muhammad Shafi(tr.), Ahmad Rabbani(ed.), 1972, Auliya-I Qasul, (AQEEL||B||802||9)

パンジャーブ大学オリエンタル・カレッジのアラビア語教授、イスラーム研究所(ラーホール)所長等を歴任し、パキスタンを代表するイスラーム古典の大家であるとともに地方史家としての一面をも持つムハンマド・シャフィー博士による 18 世紀初めに書かれたペルシア語の聖者伝 *Akhbār al-Auliyā* のウルドゥー語訳を中心とし、同じく博士の英語論文“*An Afghan Colony at Qasur*”、およびカスールのパシュトゥーン人に独特な婚礼の儀礼に関するウルドゥー語の論文や歴史書のカスールに関する地誌的記述の抜粋を収載し、その息子のアフマド・ラッバーニー氏が出版したところの、さながらカスールに関する小さな史料集成である。カスールはムガル期に殊にヘーシュギー系アフガーン人の拠点として発展した都市であるが、その歴史に関しての文献は極めて少なく、貴重な情報源である。

Muhammad Muqim bin Rahmat ullah, Muhammad Abdullah Chugtai, 1973, Waqa‘-I Sialkot,

(AQEEL||A||307||27) Lahaur, Kitab-khana-I Nauras, シヤールコートに眠る聖者イマーム・アリーウルハックに関する聖者伝。

Sharafat Naushahi, Saiyid Sharif Ahmad, 1979, Sharif ut-Tawarikh : Tarikh ul-Aqtab, (AQEEL||B||802||21) Idarah-I Maatif Naushahiya, vol.1, スーフィー教団、カーディリー派ノウシャーヒー支派の生んだ同派の過去の聖者の研究に一生を捧げた知的巨人、シャラーファト・ナウシャーヒー氏によるその主著とも、生涯の集大成とも思しき同派の聖者列伝の第 1 巻。本来十数巻に及ぶ大著である。同派はムガル期その祖ノウシャ・ガンジバフシュ(1552-1654)によって創始され、パンジャーブ一円にその影響力を及ぼした。

Shafiq ur-rahman Naushahi, Saiyid(ed.), 1998, Sharf ut-tawarikh, musannafah-I Saiyid Sharif Ahmad Sharafat Naushahi (AQEEL||B||802||19) Idarah-I Maarif-I Naushahiyah, カーディリー派ナウシャーヒー支派の生んだ知的巨人、シャラーファト・ノウシャーヒー氏の労作、シャリーフッタワーリフの索引。

Muhammad Hayat Naushahi, Hafiz Saiyid, Sharafat Naushahi, Saiyid Shrif Ahmad(tr.), n.d. Tazkirah-i Naushahiya, (AQEEL||B||??) Islamabad : Idarah-I Maarif-I Naishahiya, カーディリー派ノウシャーヒー支派のムハンマド・ハヤート・ノウシャーヒーによって著されたペルシア語による古い(1733 年脱稿)聖者列伝 Tazkirah-i Naushahiya の刊本。アーリフ・ノウシャーヒー博士によって校訂、序文と注、索引が付される。しかも、本書は同原典にシャラーファト・ナウシャーヒー氏によるそのウルドゥー語訳と同著者の生涯の紹介を加えて三部作となっている。

Sharafat Naushahi, Saiyid Sharif Ahmad, 2007, Tazkirah-I Shu‘ara-I Naushahi, (AQEEL||B||801||6) Lahaur : Oriyantal Pablikeshanz, パンジャーブで極めて有力なスーフィー教団、カーディリー派ナウシャーヒー支派の知的巨人、シャラーファト・ノウシャーヒー氏による同支派に連なる 575 人に上るウルドゥー語、パンジャービー語、アラビア語、ペルシア語の 4 言語に亘る詩人の紹介及び研究。

Muhammad Asgar, 2008, Silsilah-e Naushahiya ki Urdu Khidmat, (AQEEL||B||801||5) Karachi : Karachi University, Ph.D. thesis, 本来カラチ大学のウルドゥー語学科に提出された博士論文であるが、ノウシャーヒー派のウルドゥー文学における貢献をテーマとしながらも、極めて包括的、総合的な観点からこれに取り組まれており、こうしてこの派の系譜に連なる様々な文学者の略伝も紹介され、こうした面での情報が凝縮された、単なる研究書を超える集大成となっている。

Sohan Lal Suri, 1885, Umdat ut-tawarikh, (AQEEL||A||308||17) Lahaur : Arya Press, 5 vols., 包括的なスィク王国史。スィク教の 10 人のグルから説き起こし、王国成立以前の 18 世のスィク・サルダールたちの権力奪取へ向けての闘争、殊にランジート・スィングの祖父チャラト・スィング、父マハーン・スィングの事績に詳しく、年代記的にランジート・スィングのみならず、その後継者の治世をも扱い、叙述は更にパンジャーブ併合後にも及ぶ。本書はその出版年の点からも、発行部数(すなわち、500)の点からも稀覯本に属し、その意味ではこの方面の文献の中では最も貴重というべきであろう。

Amar Nath, Diwan, 1928, Zafar Namah-I Ranjit Singh, (AQEEL||A||508||25) Lahaur : University of the Punjab,ランジート･スィングの出自から説き起こし､ランジート･スィング治世の 1835-36 年まで事績を扱う。スィク王国の年代記。著者のアマル・ナートは、財務大臣を務めたスィク王国の重鎮、ディーワーン・ディーナー・ナートの息子であり、自身スィク王国軍のバクシー職を務めたため、その情報の確実さは折り紙つき。その幾つかの情報は極めて興味深い。スィク王国を知る上での重要な情報源である。

Shuja ud-din. Muhammad(ed.), 1965, Asrar-e Samdi, (AQEEL||A||308||35) Lahaur : Idarah-I Tahqiqat-I Pakistan, 18 世紀初期のラーホール州太守、アブドゥッサマド・ハーン(1713-1726)の事績を扱う。彼はアウラングゼーブの死の翌年にあたる 1708 年、パンジャーブではスィク教徒、バンダ・ベーラーギーの反乱が勃発したが、これを最終的に鎮圧したことで知られる。この書では、この他、その当時勃発したイーサー・ハーン・ムンジやフセイン・ハーン・カスーリーその他の反乱平定他同太守の戦役が扱われる

Tahmas Quli, 1986, Tahmas-namah, (AQEEL||A||507||21) Lahaur : Panjab Yunivarsiti, 数奇な運命を辿って小アジアからパンジャーブに至り、パンジャーブ太守ミール・ムイーヌルムルク通称ミール・マンヌーとその妻ムグラーニー・ベーガムに仕えたタヘマース・クリー・ハーンという、アフマド・シャー・ドゥッラーニーとマラーターの侵攻、スィク勢力の台頭による従来のムガル朝の体制の崩壊という激動の 18 世紀パンジャーブを駆け抜けた生き

Abdu l-Karim, Munshi, Mir Waris Ali Saifi(tr.), 1963, Waqiat-i Durrani, (AQEEL||A||508||26) Lahaur : Panjabi Adabi Akaidimi,ペルシア語の著、ムンシー・アブドゥルカリームの Tarikh-i Ahmad のミール・ワーリス・アリー・サイフィーのウルドゥー語訳である。2 部に分かれ、第 1 部ではアフマド・シャー・ドゥッラーニーに始まり、その孫のドゥッラーニー朝最後の王、シャジャーウル・ムルク暗殺に至るまでの歴史、第 2 部ではパンジャーブを含め当時のその方面の地理が扱われる。初版は 1875 年にカーンプルより。

Kashiraj, Ahmad Shuja Pasha(tr.), Panipat kiAkihri Jang, (AQEEL||A||508||17) Lahaur : Sang-i Mil,

第 3 次パーニーパットの戦い(1761 A.D.)に至る様々な事情とこの戦いの詳細。カーシーラージュのペルシア語テクストからのウルドゥー語訳。

Niaz, Muhammad Baqir(ed.), 1973, Tarikh-I Kunjpura (AQEEL||A||308||23) Lahaur : Idarah-I Tahqiqat-I Pakistan, ユースフザイ族ザッカー・ヘール出身のナジャーバト・ハーンが 1724 年に現在カルナール県カルナール郡に位置するクンジプラに創設したアフガーン小王国の 100 年(1724-1823 A.D.)の歴史。

Sher Muhanmmad Nadir, 1977, Zubdat ul-akhbar, (AQEEL||A||308||24) Lahaur : Idarah-I Tahqiqat-I Pakistan, 18 世紀後半以降より 1818 年ランジート・スィングのムルターン攻略に至るまで同地を支配したアフガーン系サッドーザイ・ナワーブの歴史。サッドー・ハーンの時代から説き起こし、ムハンマド・サルファラーズ・ハーンの治世にまでに至る。

Nazir Ali Shah, Muhammad Siddiq(tr.), 1971, Sadiq Namah, (AQEEL||A||308||31), n.p., 藩王国バハーワルプールの歴史。ペルシア語原典からの英訳。

Duni Chand, 1965, Kaigauhar Namah, (AQEEL||A||308||19) Lahaur : Panjabi Adabi Akaidimi, パンジャーブの歴史を華やかに彩った勇猛なガッカル族の歴史。最終的には、パンジャーブ北部、ポトハール地方を本拠とするに至る。

Nur Ahmad Chishti, ١٩٦٤, Tahqiqat-I Chishti, (AQEEL||B||802||14) Lahaur : Panjabi Adabi Akaidimi, 3rd. ed., イギリス人行政官の要望を受けて、ラーホールの歴史的背景とともに、ラーホールの名所旧跡、ムスリム、ヒンドゥー、スィク教の宗教施設等主としてラーホール郊外について述べた地誌。ラーホール旧市街の主要なモスクを除いて、郊外および郊外の事物に紙数は割かれ、ガズニー朝以来の歴史的都市であるのに加えて、郊外に大きく展開したムガル朝期ラーホールの営みの跡が累々として残り、またスィク王国期のそれも生々しい当時にあって存分にこれらを描くが、その叙述はそれらなむ様々な政治的、および宗教的人物や事物、過去の事件、殊にスーフィー聖者の生涯や事績に展開してゆき、更に展開が展開を呼ぶという極めて独特な語り口となっており、総じて英領期初期及び前近代ラーホールに関する情報の集大成であるかの如き様相を呈している。英領期初期の同時代的な叙述であるとともに、ラーホールの過去に関する大きな情報源である。

Kanhaiya Lal Hindi, 1977, Tarikh-I Lahaur, (AQEEL||A||307||31) Lahaur : Majlis-I Taraqqi-I Adab, ヌール・アフマド・チシュティーの Tahqiqat-I Cishti やサイヤド・モハンマド・ラティーフの著書と並び称される英領期初期のラーホールの歴史書兼地誌。植民地政府の土木技師であったカンハイヤー・ラールが、その経験をも加味しつつ、纏めたラーホールの地誌。歴

史や名所旧跡が網羅的に叙述されており、その手際のよさでは、かなり当時出現し始めていた gazetteer(地誌)に倣った形跡がみられる。ヌール・アフマド・チシュティーの Tahqiqat-I Cishti 同様情報は盛りだくさんであり、その叙述の対象はしばしば重なるが、そのヒンドゥー教徒という背景を反映してのことか、観点も異なり、Tahqiqat-I Cishti が除外したラーホール旧市街も取り上げられ、独自の重要性があるというべきであろう。

Syed Muhammad Latif, 1981, Lahore : its history, architectural remains and antiquities, (AQEEL||A||307||15) Oriental Publishers & Booksellers, ヌール・アフマド・チシュティーの Tahqiqat-I Cishti、カンハイヤー・ラールの Tarikh-I Lahaur と並び称されるラーホールの歴史書兼地誌。ただ、前 2 著がウルドゥー語であるのに対し、こちらは英語である。前 2 著同様ラーホールの歴史に始まり、旧市街及び郊外の様々な事物、名所旧跡に叙述が及ぶが、観点の違いを反映して情報としては独自なものがかなり含まれており、興味深い。前 2 著を補って余りあるものと言えよう。体裁は Lahore District Gazetter に倣っている。

Kanhaiya Lal Hindi, 1981, Tarikh-I Panjab, (AQEEL||A||308||18) Lahaur : Majlis-I Taraqqi-I Adab, スィク教の 10 人の教主(グル)に関する叙述から始まり、18 世紀中葉パンジャーブ各地に成立したスィク・ミスル(政治的軍事的党派)の活躍、ランジート・スィングやその後継者たち、最後のマハーラージャ、ダリープ・スィングに至るまでのスィク王国史と、英領統治下のパンジャーブ、カシュミール藩王国にも触れられるものの大幅にスィク教徒の歴史になっている。ただ、その観点では殊にランジート・スィング治世の事情に詳しい。

Rashid Niyaz, 1958, Tarikh-I Sialkot, (AQEEL||A||308||20) Maktabah-I Niyaz, ガズニー朝時代より営みの続く歴史的都市、シヤールコートの歴史を総合的に扱う。

Manzur ul-Haq Aiddiqi, 1977, Tarikh-I Hasan Abdal, Zil‘ Kaimbil-pur, (AQEEL||A||308||22) Lahaur : Idarah-I Tahqiqat-I Pakistan, 現在のアットク県に位置する、数々のムスリムの史跡が残り、スィク教の施設パンジャ・サーヒブがあることでも有名な歴史的小都市ハサン・アブダールの過去に関する研究書。バーバー・ハサン・アブダールやバーバー・ハサン・アブダーリーに加え、ムガル皇帝アクバルからランジート・スィングまでこの地を訪れた為政者に触れるとともに、様々な史跡について述べられている。非ムスリムのヒンドゥー教徒、スィク教徒の営みについても多くの紙数が割かれ、この種の稀な文献である。

Ganda Singh, Rais Ahmad Ja’fari Nadavi, Saiyid(tr.) 1977, Futuhat o Mihimmat-I Ahmad Shah Abdali, (AQEEL||A||508||18) H.M.Said Kampani, ガンダー・スィングの有名な著書、Ahmad Shah Abdali のウルドゥー語訳。

Gauhar Naushahi, Lahaur ke Chishti Khsndan ki Urdu Khidmat, (AQEEL||B||802||24) Lahaur, Magribi Pakistan Urdu Akaidimi, Tahqiqat-I Chishti の著者、ヌール・アフマド・チシュティーをも輩出したラーホールの著名な文人家系、チシュティー一族のその生涯やその残された作品の検討を通じて、一族のウルドゥー語発展への寄与について論じたすぐれた著。しかし単にそれのみならず、時代背景を含めて、かなり紙数が割かれたその歴史的、個々人の伝記的な叙述では未刊の、一族に残された極めて稀な資料が典拠として用いられており、その中には極めて驚くべき事実の数々が見られる。

Iqbal Salah ud-din, 1974, Tarikh-I Panjab, (AQEEL||A||307||33) Aziz Pablisharz, 総合的なパンジャーブ史研究。

Umar Kamal Khan, 1966, Saddozais in Multan : a resume of events connected with the history of Saddozais in Multan from 1652 AD to 1966 AD (AQEEL||A||308||15) the Lion Press, ムルターンに進出し、歴史的に 18 世紀後半から 1818 年までムルターンを支配したナワーブの家系をも輩出したアフガーン系サッドーザイ族の歴史。

Hashmi Faridabadi, Saiyid, Ma‘asir-I Lahaur : Qadim Lahaur ke Mashahir ka Tazkirah aur Tarikh : sanah 413a.h. /1021a.c. ta sanah 639a.h./1241a.h. (AQEEL||B||802||18) Idarah-I Siqafat-I Islamiya, ガズニー朝期ラーホールの研究書。第 1 部で政治史、第 2 部でその宗教的、文化的営みを扱う。

Muhammad Abd ullah Chugtai, 1963, Injiniaring yunivarsiti ka Tarikhi Mahaul: Lahaur ke Asar-I Qadima ka Ek Ahm Bab, (AQEEL||A||308||37) n.p., ラーホール旧市街当方のエンジニアリング大学のある周辺は、ムガル期あるいはこれに先行する時代よりムガルプラの名称で呼ばれ、また後期ムガル期ラーホール太守の館群(ベーガムプラという)も位置したといい、富める郊外であった。したがって、後々その痕跡は方々に残り、これらを紹介したのが本書である。

Ali Asgar Chishti Sabiri Jalandhari, Abu Mazhar, 1999, Shamim-I Jalandhari : Al-ma‘ruf ba Tazkirah-I Auliya-I Jalandhar, (AQEEL||B||801||10) Arakin-I Bazm-I Chishtiyah Ganaviyah, ビスト・ジャーランダル・ドアーブの主邑、ジャーランダルで活躍し、同地に眠るイマーム・ナースィル以下イスラーム聖者たちの列伝。ジャーランダルは肥沃なビスト・ジャーランダル・ドアーブの主邑であり、歴史的都市としての経験を持ちながら、イスラーム的要素が急速に失われる現在、その過去を語るものとして重要。

Zuhur Ahmad Bugwi, 1934, Tazkirah-I Mashaikh-I Bugwiyah, (AQEEL||B||902||23) Bhera : Gulam

Husain,サルゴーダーに程近いジェーラム川河畔の歴史的都市ベーラの対岸にかつて存在したところの幾多の学者、聖者を輩出した著名な集落、ブッガー・シャリーフのある著名な学者の家系に連なる聖者たちの生涯を紹介。また、特にムハンマド・ナスィールッディーン・ブグウィーの事績に光を当てる。

Fuyuz ur-Rahman, Hafiz Qari, Dr., n.d., Ulama-I Hazara (AQEEL||B||803||8) Lahaur : Farantiar Pablishing Kampani, 現在のハイバルパフトゥーン・ハー州の東部の一角を占めるハザーラ地方に輩出した比較的近代のウラマーたちの生涯を紹介した列伝。

Shihab Mas‘ud Hasan, 1967, Khittah-I Pak Ucc, (AQEEL||A||308||28) Bahawalpur: Urdu Akadimi, スフラワルディー派とカーディリー派両スーフィー教団の聖地かつ歴史的小都市ウチの総合的な歴史研究書。

Shihab Mas‘ud Hasan, 1981, Mashahir-I Bahawalpur, (AQEEL||B||801||8) Bahawalpur: Maktabah-I Ilham, かつての藩王国の首都バハーワルプールで活躍した藩王を始め、王国の重鎮、聖者及び法学者、詩人及び文学者、ジャーナリスト、政治家その他各界の著名人を紹介した名士録。

Shihab Mas‘ud Hasan, 1977, Bahawalpur ki Siyasi Tarikh, (AQEEL||A||308||27) Bahawalpur: Maktabah-I Ilham, 藩王国バハーワルプールの創設から今日に至るまでの歩みを紹介するとともに近年のバハーワルプール州創設要求を含めてのこの方面の事情にも触れた総合的歴史書。

Murad Ali Aligarhi, Saiyid, 1975, Tarikh-I Tanawaliyan, (AQEEL||A||308||29) Lahore: Maktabah-I Qadiriyah, アトック周辺を本拠とするタナーワリー部族の過去の事績の紹介を通じてその方面の過去を扱った歴史書。

Mohammad Aslam Metila, 2005, Multan-namah, (AQEEL||A||308||26) Multan: Saraeki Risarc Santar, パンジャーブ南部の歴史的都市ムルターンを総合的に扱った地誌。

Shabana Nazar, 2007, Multan : Arab Muarikhin ki Nazar men, (AQEEL||A||308||30) Multan: Shu‘bah-I Saraeki, アルバラーズリーやマスウーディー等の初期のアラブ地理学者の著述に見えるムルターンに関する記述のウルドゥー語訳付き引用を通じてその当時のムルターン像を考察した研究書。

Umar Kamal Khan, Aidvoket, 1984, Fuqaha-i Multan, (AQEEL||B||801||9) Multan: Bazm-i Siqafat,

1780 年から 1980 年に至る 200 年間にムルターンで活躍した 80 人のイスラーム法学者の事績と生涯を扱った法学者伝。

Muhammad Ali, walad-e Khwajah Rukn ud-din Gujranwala, n.d., Tazkirah-I Mashaikh-I Ameniyah, (AQEEL||B||902||5) Warburton, ナクシュバンディー派のシェイフ・アフマド・サルヒンディーの系譜に連なるスーフィーたちのタズキラ。

Khurshid Ahmad Khan Yusufi, 1992, Panjab ke Qadim Urdu Shu'ara, (AQEEL||B||803||21) Islamabad: Muqtadirah-I Qaumi Zaban, ムガル期からスィク王国期までの 100 名に上るパンジャーブ出身のウルドゥー詩人のタズキラ。

Akhtar Rahi, 1981, Tazkirah-i Ulama-i Panjab, (AQEEL||B||801||9/10) Lahaur, Maktabah-i Rahmaniyah, 2vols, イスラーム暦 13～14 世紀にパンジャーブで生を享けた、あるいは、この地で活躍し、この地に葬られたウラマー(宗教学者)伝。

Muhammad Ayub Khan, 1985, Afaginah-I Hoshiyarpur, (AQEEL||B||801||2) Lahaur: Faran Pablikeshanz, ホーシヤールプールが位置するビスト・ジャーランダル・ドアーブのアフガーン人の過去の事績を紹介。その武勲のみならず知的、文学的、宗教的様々な方面に及ぶ。

Nawazish Ali, Saiyid, 1993, Tazkirah-I Ruasa-I Panjab, (AQEEL||B||802||11/12) Lahaur : Sang-e Meel Pablikeshanz, 2vols., reprint, パンジャーブ地方の支配階層を構成した名族を網羅的に管区(division)毎に紹介した、グリフィンとマッスィー(Griffin, Sir Lepel & Massy, C.F.)の定評ある大部の名家録"Chiefs and Families of Note in the Punjab"のウルドゥー語訳。ただし、単なるウルドゥー語訳であるにとどまらず、叙述に登場する著名人の肖像画等も盛り込み、独自なものに仕上げられている。また、ローマ字表記では不完全な固有名詞も本来のアラビア文字表記で確認できる利点もある。

Lepel H. Griffin , 1976, The history of the principal states of the Punjab and their political relations with the British government : the rajas of the Punjab (AQEEL||A||308||13) Oriental Publishers, パンジャーブ地方の藩王国を網羅的にその沿革および英領政府との関係を交えて紹介した藩王国列伝。

Ashfaq Bukhri, 2003, Layalpur Kahani, (AQEEL||A||308||32) Shangrila Printers aind Pablisharz, 著者アシュファーク・ブハーリーによるかつてのファイサラーバードすなわちライヤルプルに纏わる回想録。エッセー集。